れた時期があり、労働衛生に関する新しいことや歴史に関ることなど、折にふれては教えていただいたことが多かったことを、年を経るにつれてしきりに思うのである。

また、本書には資料中にあるその時代の産業現場のさし絵など数多くみられ、興味を持って理解を深めることが出来る。その他、最近著者が現地で撮影されたという古代ローマの水道橋アーチ、ポンペイの街のかつての貯水槽（鉛の水槽の痕跡がある由）、ポンペイの歩道わきの水道鉛管等々（本書四頁・五頁）著者の今なお壮んな探求心には驚く他はない。

一巻から七巻まで、連続物ではあるが、各巻それぞれ単独で読んでも一向に差支えない。このあと必ずや八巻あるいは九巻と続くものと思われる。著者に訊いてみたい気もするが、それは野暮と言うべきか。

（保坂　捷子）

〔労働科学研究所出版部、川崎市宮前区菅生二―八―一四、電話〇四四―九七七―二一二一、一九九二年、A五判、二五〇頁、定価四五〇〇円〕

シャーウィン・B・ヌーランド著、曽田能宗訳

『医学をきずいた人びと』上下二巻

S・B・ヌーランドの『医学をきずいた人びと』上下二巻は、ヒッポクラテス、ガレノス、ヴェサリウス、パレ、ハーヴェー、モルガーニ、ハンター、ラエネック、ゼンメルヴァイス、麻酔、フィルヒョウ、リスター、ジョンズ・ホプキンズ大学及び臓器移植の各章から成り立っている。

著者はエール大学の外科医師で、学生を指導するかたわら、大学医学史図書館に通い、臨床医としてだれでも知っているべき医史を徹底的に研究した。本書は著者の鋭い視点から捉えた医学史で、ヒッポクラテスから現在に至るまでの一貫した医術と医療の見方と、これに取り組む意欲が示されている。単に事実を記述するだけでなく、その時代の背景に深い洞察力を加え、史的事実を過去のこと、同時代のことだけでなく、未来のこと、すなわち後年実際になされたこととの比較にまで言及している。ヴェサリウスの『ファブリカ』、ハーヴェーの『心臓と血液の運動』、モルガーニの『病気の座と原因』、フィルヒョーの『細胞病理学』が十六世紀以降の四大医書として高く評価され、千五百年に及んだガレノス説が崩壊した過程がよく描写されている。ヴェサリウスとカルカールによる科学と美術の融合である『ファブリカ』の章にはレオナルド・ダ・ヴィンチも登場すれば、三百年以上も後に発刊された『グレイの解剖書』も登場する。

外科技術に対する影響について、著者はパレ以前にはヒッポクラテスしかおらず、パレ以後にはJハンターしかいないと決めつけ、戦場での戦傷を、雷と大砲の差に譬えている。当時の理髪外科医の地位を内科医とならぶ地位に高めることができたのは、パレの思いやり、正直さ、優しさ、好奇心、誠実さの人間的思想と結論づけている。第一次世界大戦で進

歩したのは腸の手術、第二次世界大戦では胸部手術、朝鮮戦争では血管手術、ヴェトナム戦争では外傷患者の緊急輸送が進歩したとパレの章に記している。

ラエネックとゼンメルワイスの章では余り他書では記していないエピソードが盛り込まれている。

ヨーロッパの医学が新大陸のアメリカに定着進歩を遂げた経緯については、ジョンズ・ホプキンズ大学を例にとり、ハルステッドとタウシグに焦点をあて物語っている。女性小児心臓病学者としてのヘレン・タウシグの青色児の手術は輝かしい二十世紀医学の勝利であった。青色児を救うための人工動脈管を造ることは彼女の独創的アイデアであった。女医の理想とも言えるタウシグは一九五九年ジョンズ・ホプキンズの小児科教授となったが、八十八歳の誕生日の三日前に交通事故で亡くなった。

W・オスラーについては特別な章を設けていないが、本書の諸所に彼の思想、人生像が紹介されている。

終章は「臓器移植の話」で結ばれている。バーナード博士がケープタウンで人類最初の心臓移植を果たしたのは一九六七年であった。初期の心臓移植は死亡率が高かった。本書の書かれた時点で、手術しなければ望みがなかった移植患者の七五パーセントが術後一年間、六五パーセントが三年間生存し、この数字は更に向上するであろうとしている。この好成績の原因は免疫抑制剤シクロスポリンの発見やステロイド、抗生物質の併用による結果である。まさに臓器移植史こそは過去の学問でなく将来への展望と考えられる。

著者ヌーランドは病気の原因が単純な原因、たとえば細菌によると考えれば、これを発見し取り除けば良い。事実細菌病原説は百年間医学研究のモデルを担ってきた。現代医学の進歩もほとんどこれにもとづいている。しかし臓器移植は違う。傷ついて役に立たなくなった臓器を取り除き丈夫な臓器を入れ替えれば良い。これは大昔の解剖中心的思考と一致し、経済的な還元主義にほかならないという。また臓器移植は倫理、宗教、社会、経済、その他の諸問題を包含している。本書は医学とは何か、その医学の歴史を探究する学問とは何かという疑問を投げかけているように思われる。

（大滝　紀雄）

〔河出書房新社、東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二、電話〇三―三四〇四―八六一一、定価各巻三六〇〇円〕

新村拓著『ホスピスと老人介護の歴史』

本書の著者である新村拓氏は本書の他に『日本医療社会史の研究』、『死と病と看護の社会史』および『老いと看取りの社会史』をすでに刊行しておられる。この中であとの二冊と本書は現在わが国でもっとも重要な問題となっている老人の病・死・看護の一連のテーマを角度を変えて歴史的に社会的に分析したものである。とくに本書はホスピスおよび老人介護を中心として述べている。